



# 安野光雅美術館通信

No. 7

2007.02.20/ 津和野町立安野光雅美術館発行

## 安野光雅作詞・森ミドリ作曲

### 組曲「津和野」が完成

安野さんと言えば、誰しもが画家やエッセイストと思われるでしょう。その安野さんが作詞もされる事を皆さんはご存じでしょうか？昨年出版された「雲の歌風の曲」(岩波書店)では、安野さんの歌詞に、長い親交がある音楽家の森ミドリさんが作曲した楽しい歌が、安野さんのほのぼのとした画とともに紹介されています。これらの曲は、合唱曲としても歌われていて、「東北大学男声OB合唱団・Chor青葉」や地元のコラスグループ「鷺の舞ムジカ合唱団」の皆さんが歌っています。

安野さんが作詞したきっかけは、森ミドリさんが安野光雅美術館に来館した際に、安野さんの「つわのいろは」の詩に惹かれ、曲を作ったこと。その森さんが、今度は合唱曲の組曲の構想を安野さんに伝え、安野さんの少年時代の思い出をつづった新たな曲を加えて、組曲「津和野」として完成しました。

安野少年の思い出がぎつり詰まったこの組曲「津和野」は、東北大学男声OB合唱団・Chor青葉の皆さんによって、来る三月十一日にオペラシティコンサートホール(東京)、同月十七日に安野光雅美術館ロビーで披露されます。なお、安野光雅美術館でのコンサートの詳細は下記のとおりです。

## 六度目の春を待つ

館長 大矢鞆音

庭の梅が一輪の白い花をつけた。

万葉の時代、中国より渡来した梅は白梅であり、春先がけて咲く「春告げ」の役割を果たしていたらしい。

万葉の歌人大伴旅人が太宰府において、「梅花の宴」を開き、山上憶良ら三十二人で梅の花をもとにうたを詠んだのも、誰が春の到来をいち早く見つけることができるかを競い合っていたことだった。

こここのころの暖冬のせいかな、たった一輪だった花も翌日にはいっせいに開き、華やかさを増している。梅の花の白さは高貴さを、そしてその香りは早い春の訪れと、明るい春への希望を人びとに抱かせる。

安野さんの育った山陰の冬の寒さは殊のほか、このことだが、梅の一輪から日射しとともに、れんぎょうが咲き、木蓮が咲き、桜の咲く春へと移っていく。そして万葉の梅で津和野の町が彩られる頃、「安野光雅美術館」も六周年の新しい歩みを始めているにちがいない。



## 六周年記念事業 城跡コンサート

- 日時 平成19年3月17日(土) 午後6時15分開場、午後7時開演
- 演目 「混声合唱のための組曲『津和野』(7曲) ほか
- 出演者 東北大学男声OB合唱団・Chor青葉(80人)、鷺の舞ムジカ合唱団 音楽家・森ミドリさん、画家・安野光雅さん
- 会場 安野光雅美術館ロビー
- 入場料 前売券五百円、当日券六百円、中学生以下無料(全席自由席)

### つわの野の風

夢に津和野を おもほえ  
見よ城跡へ うすけむり  
泣く子寝入るや 鷺舞う日  
遠雷それて 風立ちぬ

泳ぎし川の 水車小屋  
峠の黍を 渡る風  
夜汽車の胸に きしむ音  
げに初恋に 似たるかな

ああ我が谷は 霧の中  
オルガンの歌 風に消え  
老いしポプラは 影も無く  
友呼ぶ子等の 声かなし



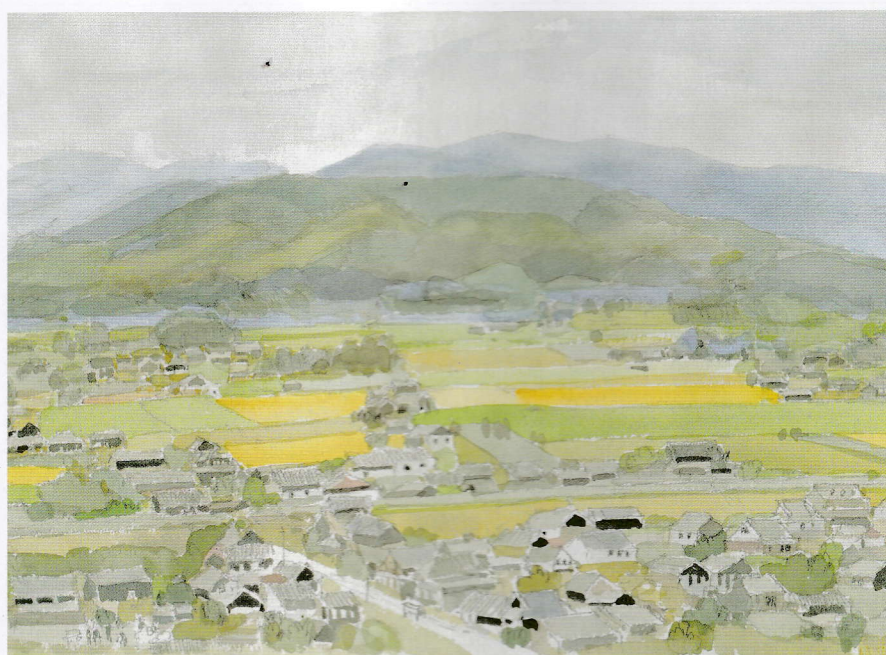
# 安野光雅の「旅」から生まれた作品の数々

平成十九年度は、作家・司馬遼太郎さんの作品に関連する装画、改訂新作「旅の絵本Ⅱ」をはじめ、初公開の「昔咄きりがみ」シリーズ、絵本作品、風景画など多彩な安野光雅の作品を展示します。ここでは展示作品の紹介をします。

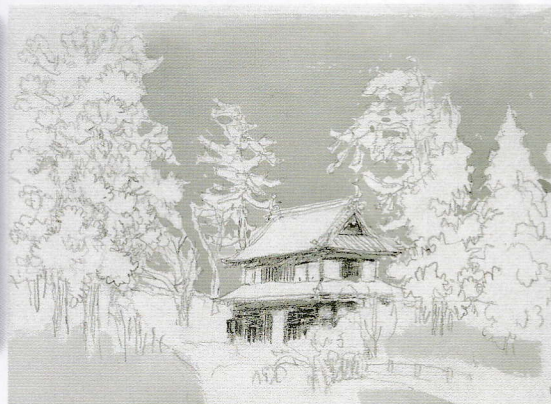
## ●「司馬遼太郎さんの歩いた道」

司馬遼太郎さん（一九二三～一九九六年）は小説やエッセーなど数多くの作品を生み出してきた作家です。

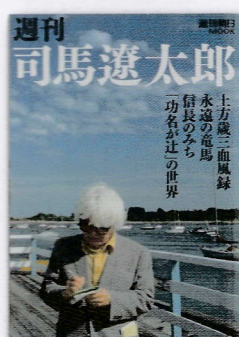
司馬遼太郎さんの作品群の中でも紀行文「街道をゆく」シリーズは雑誌「週刊朝日」に一九七一年一月一日号掲載『湖西のみち』から一九九六年三月十五日号掲載「濃尾参州記」（連



『週刊朝日 MOOK・週刊司馬遼太郎』より『安芸市の遠景』／2006年・朝日新聞社



「街道をゆく」より『弘前城東内門』



載第七回にて絶筆）まで、実に二十五年の長きにわたり連載されました。

司馬遼太郎さんが訪れた場所は全七十二街道、日本全国はもとよりアジア諸国、欧米へも足を伸ばし、その土地の持つ歴史や風土、文化を綿密に探査し、実像に深く迫って書かれました。同シリーズは単行本四十三冊にまとめられています。

安野は一九九一年から最後まで約六年間、司馬遼太郎さんの書く「街道をゆく」の装画を担当し、その取材旅行に同行、スケッチを行ってきました。



（画集：右より）

「スケッチ集・街道をゆく」1997年、「台湾小景－街道をゆく スケッチ集－」1995年  
「ニューヨークの落葉－街道をゆく スケッチ集－」1996年、すべて朝日新聞社

その取材旅行の日々について安野は「あの司馬さんを中心にしてしゃべっていると、酒というより、話に酔って、実に不思議な雰囲気の世界が出現するのでした。ほとんどアラビアンナイトの世界です。わたしはひそかに『司馬千夜一夜』だなど思っていました。」（「街道をゆく」展図録より／一九九七年・朝日新聞社発行）と、楽しかった想い出を述べています。

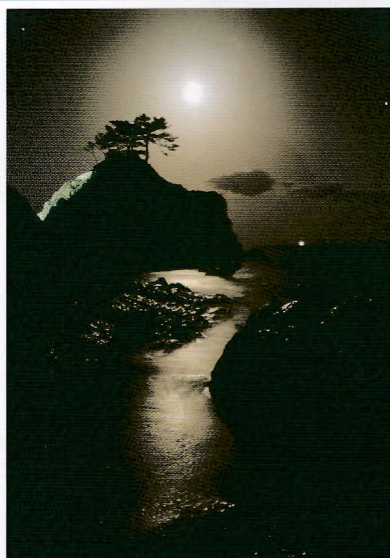
展示の春期・夏期は二〇〇六年から二〇〇七年三月まで「週刊朝日」に連載の「週刊司馬遼太郎」装画を二部に分け初公開、秋期・冬期は「街道をゆく」装画を展示します。

安野にとって特別な存在である司馬遼太郎さんの足跡を辿り、また、共に歩いて描かれたスケッチの数々です。

### 小林修写真展

## 「司馬遼太郎さんの歩いた道」

会期 第1期 3月9日（金）から6月13日（水）  
第2期 6月15日（金）から9月12日（水）  
会場 桑原史成写真美術館（駅前）



桂浜・竜王岬／高知  
龍馬の銅像がある桂浜は月の名所でもある。



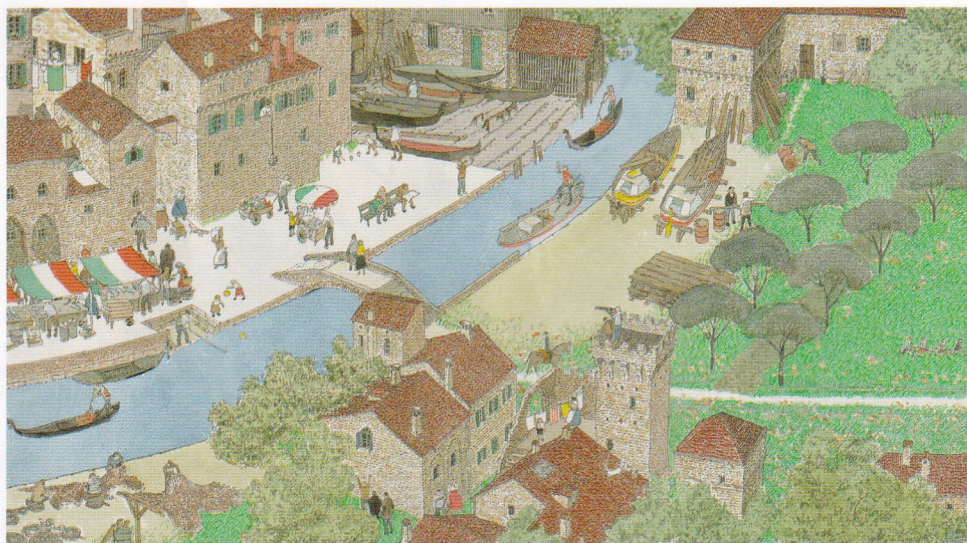
小林修（こばやし・おさむ）  
1966年、群馬県生まれ。立教大学英米文学科卒。90年、朝日新聞出版写真部入社。アサヒグラフ・アサヒパソコンの表紙などを担当。現在、週刊朝日誌上に「週刊司馬遼太郎」の写真を連載。

同時開催 桑原史成写真展  
報道写真家・桑原史成の業績―沖縄・筑豊―

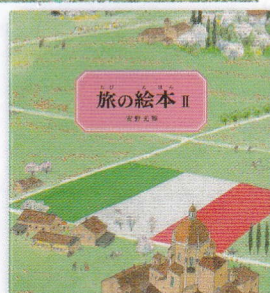
## ●「旅の絵本」シリーズ

現在、六編刊行されている「旅の絵本」シリーズは、各編ひとつの国がテーマになっています。空から眺めたような景色が広がる画面の中には、その地で暮らす人々の生活や伝統文化、特色豊かな町並み、自然などが広がっています。その中を馬に乗った旅人が進みます。

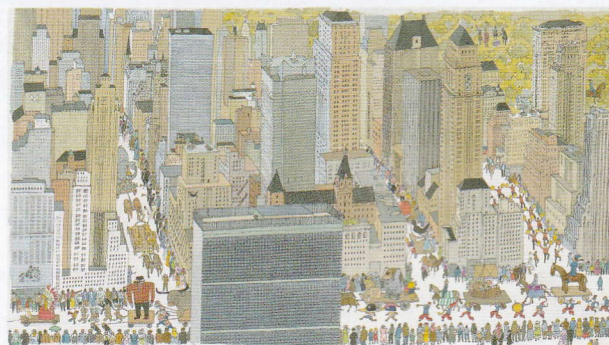
画面のあちこちに安野流のユーモアが散りばめられており、何が描かれているか、また描かれた人々に起きているドラマを空想してみるのも楽しみ方のひとつです。



「旅の絵本II」(改訂版)の作品と絵本(右) / 2006年・福音館書店



「旅の絵本VI」より『オーデンセ』



「旅の絵本IV」より『ニューヨーク』



「旅の絵本III」より『セントポール寺院』

### ★春期展 「旅の絵本II・改訂版」

一九七八年に刊行された「旅の絵本II」が全面的に彩色し直され、二〇〇六年秋、「改訂版」として発行されました。

舞台は、高い芸術文化と有史のある国イタリア。本編全二十一場面には、緑美しい丘陵地帯や歴史ある町並みとともに、「新約聖書」に基づいたイエスの生涯や有名な絵画をモデルにした光景などが描かれています。

### ★夏期展 「旅の絵本VI」

旅人が往くのはデンマーク。数多くの童話を創作した作家H・C・アンデルセン(一八〇五―一八七五年)の生まれ故郷です。このデンマーク編では「マッツウリの少女」や「人魚姫」、「はだかの王様」などアンデルセン童話にちなんだものが全場面に渡りたくさん描かれており、メルヘンの世界へと誘われます。

### ★秋期展 「旅の絵本III」

ボートに乗った旅人がドーバー海峡を越え上陸したのはイギリスの地。ピーターラビット(作…ビアトリクス・ポター／一八六六―一九四三年)の舞台・湖水地方に代表される美しい緑の国土を持つイギリスの村に住む人々が日常を営む様子が随所に描かれています。

### ★冬期展 「旅の絵本IV」

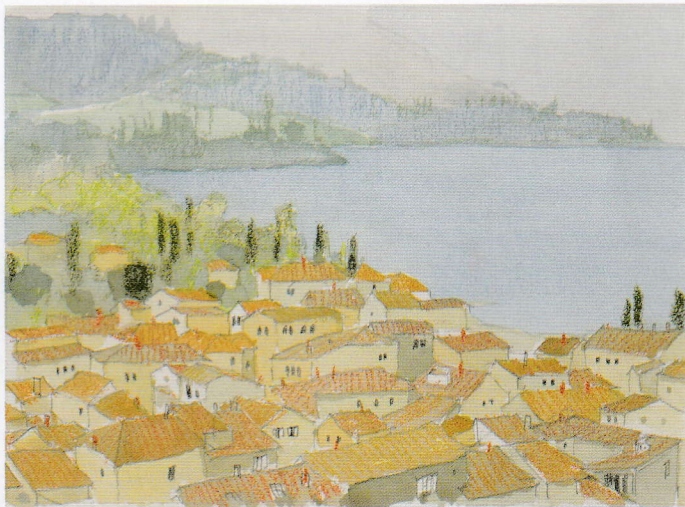
旅人はヨーロッパを離れて北アメリカ大陸へ渡りました。多民族が暮らすアメリカをテキサス、ニューヨーク、ワシントンと西から東へと歩を進める旅はアメリカの歴史をさかのぼるものにもなっています。



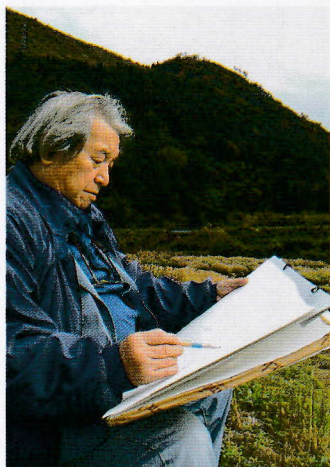
国旗が印象的な「旅の絵本」シリーズ(福音館発行)  
左より「旅の絵本VI」2004年、「旅の絵本III」1981年、「旅の絵本IV」1983年

## ●「安野光雅の旅」

安野はこれまで何度も外国へ赴き、風景をスケッチしてきました。今年度は画集「イタリアの丘」「ヨーロッパの街から村へ」「イギリスの村」「アメリカの風」収録作品を展示します。安野の画集にはそのスケッチと共に旅の記録とも言えるべき文章が添えられています。安野光雅美術館では風景画と共にその文章も併せて紹介しています。一枚の画が持つ物語も感じながらご覧下さい。

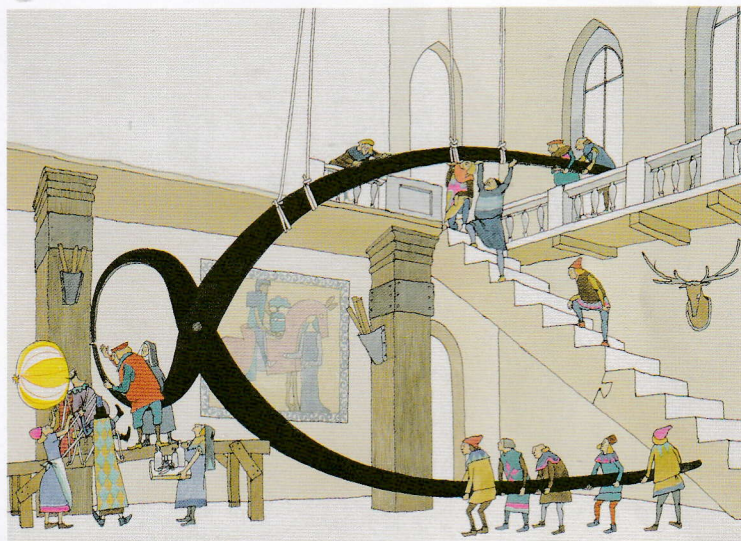


「イタリアの丘」より『ガルダ湖と町』／1980年・朝日新聞社

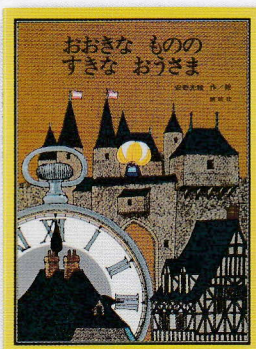


故郷・津和野でスケッチをする安野光雅

## ●「安野光雅の絵本」



(上：作品／左：絵本)  
「おおきなもののすきなおうさま」より  
1976年・講談社



「ふしぎなさーかす」  
1971年・福音館書店

### ★「おおきなもののすきなおうさま」

「大きな」ものに憧れる、そんな思いをしたことがある人も多いでしょう。この作品の主人公のおうさまも大きなものが好きでした。おうさまの一日は屋根よりも高いベッドで目覚め、プールのような洗面器で顔を洗い、庭のような広いタオルで顔をふいて始まるのです。おうさまの持ち物はとにかくなんでも大きいのです。両手で抱えることのできないほど大きなフォークやナイフは不便そう、百年かかっても食べきれないほどのチョコレートには歓声が上がりそうです。

しかし、人間の手で作られる物には限界があります。大きな大きな植木鉢にかわいい、かわいいチューリップがひとつ咲きました。……生命は人間が安易に作ることができないかけがえのないものであることを伝えられている気がします。

### ★「ふしぎなさーかす」

我が家の片隅で夜な夜なサーカスが繰り広げられているとしたら、ちよつと覗いてみたくなるでしょう。「ふしぎなさーかす」はそんな好奇心を満たしてくれる作品です。

「ふしぎな」サーカス団員はこの家庭にもある身近な道具を器用に操ります。ペン先のジャグリングや切り紙影絵の曲芸などを夜明けまで演じるのです。この絵本には、物語文はほとんどありませんが、その分、空想の世界が自由に広がります。

今宵、あなたの家でも「ふしぎなさーかす」が開幕するかもしれません。



「ふしぎなさーかす」より

## ★「昔咄きりがみ」三部作

むかしばなし

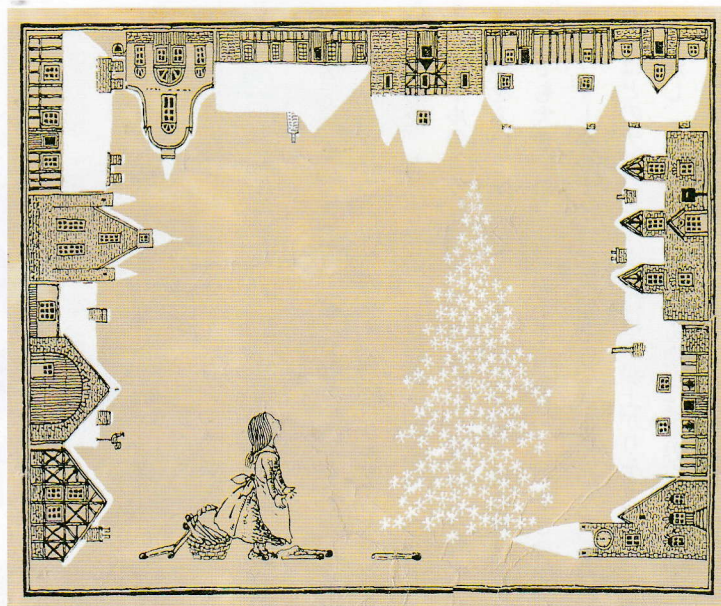
「昔咄きりがみ」シリーズは「桃太郎」「舌切雀」「花咲爺」の三作があり、日本人になじみが深い昔ばなしを、黒色の紙を切り抜いて作った「きりがみ」により安野流に表現した作品です。白と黒で創られた彩りのない2色の世界は影絵を見よう、水彩で描かれた作品とは全く異なる趣を感じさせます。また絵と同じ紙面に切り出された「咄」は独特の語り口調で、不思議な雰囲気を感じ出しています。語り継がれてきた寓話の意味も改めて考えさせられる作品です。



(右：作品)  
「昔咄きりがみ花咲爺」より  
(下右から：絵本)  
「昔咄きりがみ桃太郎」  
「昔咄きりがみ花咲爺」  
「昔咄きりがみ舌切雀」  
すべて 1974 年・岩崎美術社



## ●安野光雅のクリスマス絵本



「マッチウリのクリスマス」  
〈改訂版〉より

## ★「マッチウリのクリスマス」

この絵本は元来、一九七九年にイギリスの出版社ボードリ・ヘッド社でクリスマスギフトとして限定発行されたものです。それを日本国内で一九九三年に童話屋が発行、絶版となっていました。

二〇〇四年に安野光雅美術館が童話屋発行の絵本を底本として改訂版として発行しました。改訂にあたり、安野はそれまでなかった物語を新たに作り絵に添えました。

安野曰く、アンデルセン作「マッチ売りの少女」のパロディー版で、寒さ厳しい冬空の下、街角で少女が売っているマッチにはこんな秘密があったのかと思わせるおはなしです。

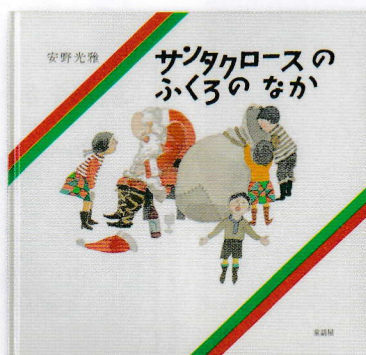
また、この絵本のカバーに描かれている雪は、見方によっては立体的に見えるという仕掛けがしてあります。

クリスマスの夜です  
雪がひどくなってきました  
マッチは売れないし手足は凍えます  
この子はマッチを一本すりしました  
この女の子にだけ、  
クリスマスツリーが見えました

「マッチウリのクリスマス」〈改訂版〉  
2004 年・安野光雅美術館

『この世界にあるすべてのものは、サンタクロースからの贈物ではないかと考えて、絵本を描こうと思いました』という安野が、思いつくままにどんどん描いたという作品です。花や花火、虹、赤ちゃん、虎、海賊、楽しいもの、怖いもの、いろいろな入っているのはサンタクロースの袋の中、と遊び心がいっぱい詰まっています。

一場面毎に描き足される袋の身、安野の絵本の制作過程を覗いているような気持ちになる構成になっています。



「サンタクロースのふくろの中」  
2006 年・童話屋

## ★「サンタクロースのふくろの中」

## 一枚の写真から

この写真は、一九六二年、安野光雅が三十六歳初めて海外旅行にでかけた時の想い出の写真だそうです。

場所はイタリア・ローマ、自らのカメラでセルフタイマーで撮影したものだということです。



## 安野光雅サイン会

安野光雅美術館開館6周年記念事業の一環としてサイン会を開催します。

前夜開催の「城跡コンサート」と共にご参加ください。

〔日時〕 平成19年3月18日(日)

①午前11時～、②午後2時～

〔会場〕 安野光雅美術館 昔の教室

〔定員〕 各回80名

※当日、安野光雅美術館にて著書をご購入のお客様に整理券を配布します。

## いわみ美術回廊

島根県西部「いわみ」地方には、個性あふれる博物館がいくつもあります。このうち、安野光雅美術館、今井美術館、葛飾北斎美術館、島根県立石見美術館(グラントワ)、世界こども美術館、石正美術館、雪舟の郷記念館、杜塾美術館の8館が連携して、2002年4月、「いわみ美術回廊」が発足しました。

「いわみ美術回廊」では加盟館を廻るスタンプラリーを行っています。8館全てを訪れた人には各館のオリジナルグッズの詰め合わせをプレゼントします。それぞれに特色豊かな美術館を楽しんでみませんか。

詳しくは下記『しまねバーチャルミュージアム』ホームページをご覧ください。

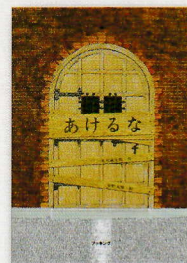
<http://www.v-museum.pref.shimane.jp/special/vol03/about/index.html>

## 安野さんの仕事



「安野光雅 風景画を描く」  
2006年10月15日・NHK出版

1995年にNHK教育で放送された趣味百科「安野光雅 風景画を描く」のテキストをもとに加筆されたもの。スケッチ画、写真、文章により構成され、スケッチすることや画材について書かれている。



「あけるな」  
2006年11月30日・ブックング

谷川俊太郎・作、安野光雅・絵。1976年銀河社より発行された本を底本に復刊。

「あけるな」と書いてあれば開けてみたいという衝動にかられる、その扉の向こうには何があるのか。緊迫感漂う絵本。

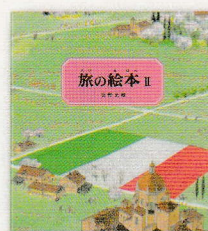


「みちの辺の花」  
カラー版

2006年9月10日・講談社

杉本秀太郎・文、安野光雅・絵。既刊単行本を文庫化したもの。

四季折々の草花について書かれたエッセーと100余点の画を収録。



「旅の絵本Ⅱ 改訂版」  
2006年11月25日改訂

福音館書店

旅の絵本第2作イタリア編。1978年発行のオリジナル版を全場面、彩色し直し解説文を加えた改訂版。新旧2冊を見比べて違いを探してみても。



「サンタクロースのふくろの中」

2006年10月24日・童話屋

サンタクロースのふくろの中をこっそりのぞいてみたら…。いろいろ詰まっている、夢がふくらむ楽しいクリスマス絵本。

## 平成19年度 展示スケジュール

会期	テーマ	第1展示室			第2展示室	
	期間	旅の絵本	旅のスケッチ	司馬遼太郎さんの歩いた道	絵本いろいろ	
春期	3月9日～ 6月13日	新作 旅の絵本Ⅱ(改訂版) ーイタリア編ー	初公開 イタリアの丘	新作 「週刊司馬遼太郎」装画① ※会期中展示替えを行います。	おおきなものの すきなおうさま	初公開 昔咄きりがみ舌切雀
夏期	6月15日～ 9月12日	旅の絵本Ⅵ ーデンマーク編ー	ヨーロッパの 街から村へ	新作 「週刊司馬遼太郎」装画②		初公開 昔咄きりがみ花咲爺
秋期	9月14日～ 12月12日	旅の絵本Ⅲ ーイギリス編ー	初公開 イギリスの村	「街道をゆく」装画 (ニューヨーク、台湾)	ふしぎな さーかす	新作 サンタクロースのふくろの中 (～12月28日)
冬期	12月14日～ H20年3月12日	旅の絵本Ⅳ ーアメリカ編ー	アメリカの風	「街道をゆく」装画 (日本)		初公開 昔咄きりがみ桃太郎 (1月1日～)

休館日は平成19年6月14日(木)、9月13日(木)、12月13日(木)、12月29日(土)～31日(月)、平成20年3月13日(木)です。

会期・展示作品については諸事情により変更になる場合がありますので予めご了承ください。



島根県津和野町立

安野光雅美術館

〒699-5605 島根県 鹿足郡 津和野町 後田イ60-1  
TEL(0856)72-4155 / FAX(0856)72-4157  
\*津和野町ホームページでも検索できます。  
<http://www.town.tsuwano.lg.jp/anbi/anbi.html>